新井白石論（一）

――自伝『折たく柴の記』を中心に――

田川邦子

（一）

こころみに、『徳川思想史研究』（田原嗣郎著）とか、『近世儒教思想』（相良享著）などという、近世思想史研究の最近の労作を繙いてみると、新井白石という独立した項目は一つも見当たらない。確かに近世の思想史、近世哲学史とでも言い換えて、もっとも厳密、かつ限定的に規定すれば、思弁的な儒教哲学に集約帰結されるのであろうし、国学や心学など、いち応別系統に考えられながら、社会的には大きな影響力を持った思想的流派も、儒教思想の存在を抜きにしては考えられないという一面もあるのである。だからといって、その影響力を、例えばフッサールの現象学が、サルトルの文芸思想に与えた影響と同じような度合の、濃密なものと考えることはとてもできない。近世思想史を考える度にいちばん当惑させられるのは、観念的思弁的な儒教思想は、一種の政治上の理想主義として、現実に大きな関わりを持ちながらも、実際に政治を動かす原動力になった例はあまり見られず、また他の文化や芸術の諸領域からも孤立していて、思想という言葉にこめられている、現実との間のなまなましい緊張関係に欠けていることなのである。支配と被支配の階級関係が固定し、儒教思想はもともと支配者の政治哲学ともいうべきものであったから、それが他の文化的諸領域と融和しきれないというのは、当然のことであったかもしれない。しかし近世の思想や学問を言うとき、このような畸型的な形で存在し得た儒教が、第一の正統性を主張する資格を持っているわけだから困るのである。

新井白石は近世の学問や思想、とりわけ儒学が閉塞的世界で自足的に孤立しているといった一般的状況のなかでは、とりわけ異彩を放っている一人の学者であり、政治家であり、思想家なのである。なるほど彼は、坐して思索、著述に耽けるような、儒教哲学専門の学者ではないし六代将軍家宣への侍講を別にすれば、弟子を教えることにも、それほど熱心だったとは思われない。それでも彼を一級の学者であり、思想家であったと断言できるのは、自伝『折たく柴の記』などにも見られるように、見聞や体験一つを語るにしても、その背後には常に、彼が彼なりに関わり、彼なりに解釈してきた人間や現実についての性格や意味づけが存在し、それが鋭く表出されて、文体もたいへん動的だからである。近世三百年間のうちでも、白石は第一級の散文家であった。それは自分をいつも静止的な状態のなかに止めておくことができないという、彼の個

性の激しさに由来していると思われるのであるが、思想というものをこのように、生きた文体や文章、強い個性というものに換置できる可能性のあるものと考えている私などには、近世の思想史というような場合、どうして白石あたりから語り始められないのか不思議な思いがするのである。

木下順庵の門下で、その学問の系流からいえば朱子学系統に属する白石であったが、彼の学問の特徴が、儒教哲学的な思索を観念の世界に深化させるというような、深く狭い型を辿るよりも、歴史学・言語学・考証学というように、広く多方面にわたっているのは、よく知られていることである。とりわけ歴史学の分野で為し遂げた仕事は優れているのであるが、その学問の史的位置づけということになると、どの程度の評価が与えられているのであろうか。たとえば『日本における歴史思想の展開』[1]という論文集を見ると、「理」を前提とする朱子学的思考と、「物」を前提とする徂徠学的思考の二系列が、徳川時代から現代日本にも及び、近世前期では、前者には羅山、鵞峰、徳川光圀、新井白石があり、後者は素行—徂徠—宣長を経て、近代日本の実証史学へ連なる系列であるということになっている。[2]素行—徂徠—宣長から近代実証史学へ至る系列というのは、いち応了解するとしても、これをあまり重要視する余り、白石を朱子学的思考タイプのグループの中に入れてしまわなければならないというのはどういうわけなのか。おそらくこのような二系列による分類というのが、理論的にはすっきりしているとしても、実際にはかなり無理があるのではないだろうか。歴史思想というものを、その思考のタイプや方法だけで整理しつくしてしまうことは不可能だと思われるのは、それが現実に生きている人間が現実に参加していく、その生きた方法や姿勢をも含めてとらえなければ、到底意味が無いと思われるからである。自分をいつも静止的な状態のなかに止めておくことができない、その個性の烈しさによって、白石は歴史をもまた動態としてとらえる。それは歴史に登場する人間が絶えず行動しているからで、その人間の行動のなかから、「本朝の天下の大勢、九変して武家の代となり、武家の代又五変して、当代におよぶ」（『読史餘論』）という、歴史の変転の相を、事実に即して理論的に跡づけたわけである。徳川政権を擁護する積極的な姿勢が、その歴史観の限界にもなっているという見方も成り立つかもしれないが、それが彼にとって決してマイナスになっていないのは、公家政権から武家政権が、分化独立していくその過程の観察に特に力を入れ、記述も精緻を極めていることでも分るのである。公家政権に比して、武家政権がひときわ優れた政治体制であるという認識が、『読史餘論』を成り立たせている思想的根拠であり、それは彼の生きた時代の徳川政権を、肯定擁護する姿勢から生じたもので、何よりも、武士であることの彼自身の自覚の強さが全ての原動力になっている。

『読史餘論』中、所々に挾まれる人物評は、たとえば、「此人（足利尊氏のこと）、初メ兵を挙しより此かた、廿六年の間、一日も干戈動かぬといふ事もなく、天下終に定る事を得ずして、君臣父子兄弟互に相争ひし事、古今ためしなき事也。すべてみづから正しからざりし故に、人を正す事かなはざりしによれるなり。されど此人遂に、武家の棟梁となられし事は、公家の政務の、ことの外に武家の世におとれる事を、士民能知りぬれば、誰にもおはせ、武家の代を興し給はむ人を君とし参らせ

むと、天下の思ひしたひしに、幸に此人朝敵となられし故に、其名をば悪むといへども、其実を慕へり」と、足利尊氏評を記し、「大かた此人は、其器度寛やかにおはせし事は、毎〻事に見えたり。詐謀は直義には及び給はざりしにや。軍の術ははるかにまさり給へりと見えし」などとも書いている。

白石の書く人物評には興味深いものがある。それをひとくちに言えば、公平且客観的ということになるが、一人の人物を見るにも、その人の性格や才能を描き出すと同時に、特に政治史上に、その人物の果した歴史的役割を客観的に述べることに力をつくしているのである。人間と事件、事件と人間という連鎖のなかに、彼の歴史記述は循環していくのであって、これを『本朝通鑑』や『大日本史』などと同列に見るのは、不可能と思われるのである。

歴史家としての白石、政治家としての白石に深入りするのはここの目的ではないし、このきまりきった所に収まり難い、多面的な才と業績を持つ人の、全ての面にわたって述べつくすのはまことに難しい。それで百科全書的知識を有する人物[3]だという評価も生じてくるわけだが（桑原武夫）、この幅の広い多面的な才を持つ白石の姿が、もっとも手っ取り早く鮮やかにその像を結ぶのは、やはり政治史上であり、宝永六年（一七〇九年）から、享保元年（一七一六年）の七年間、家宣、家継両将軍の政治顧問として、幕政を事実上左右したその経歴が、白石という人物のいちばん特徴的な面として、多くの人々に印象づけられてきたように思われる。歴史家はその政治を文治主義と名づけて、短期間ではあったが、比較的穏やかな人間主義的政治が行われた時期として評価を与えてきたわけで、一人の学者の政治的理想主義が、直接実際の政治面に反映、実行された稀有な例として注目するのが普通のようである。

しかし戦前の歴史学者、例えば栗田元次氏（その著に『新井白石の文治政治』がある）などによる、白石の文治政治に対する評価は、あまりに礼讃が過ぎて却って印象に乏しくなっているうらみがある。これに対して経済史研究家の側には、特に白石の経済政策に対して、相当厳しい否定的な見方があったことは、宮崎道生氏が『新井白石の研究』のなかで採集された資料によっても明らかだ。文治政治とは、為政者が、儒教にいうところの聖人君子の理想的な仁政を実践化し、「外国との闘争を防ぐと共に国内の治安を確保し、自己の利害を全く顧みず、人民の負擔を軽くし、経済を安定して、人民の生活を物質的にも精神的にも安定することに全力を盡す」（栗田元次著『新井白石の文治政治』）ような政治を指しているのであろうが、最近では歴史学者の方からも、白石の「文治政治」論という、戦前からの伝統的評価を覆すような見方が出されているのは、やはり興味のあることだ。大石慎三郎氏の『元禄時代』（岩波新書）である。

結局近世封建時代の社会、経済の仕組みのなかで、民衆にとって何が善であり、何が悪であったかという根本的問題から出発すれば、近世の各時代の政治経済政策の良し悪しは、一人の経世家の政治的良心などとは無関係に、民衆の生活の繁栄と安定に、どれほど力をかしたかという点で判別する他は無いというわけなのだろう。だとすれば、たとえば元禄以来の商品流通の拡大に対応して、貨幣の改鋳を度々行い、質を落して流通量を殖やした、白石の政敵荻原重秀と、通貨の量を制限して質を

慶長の昔にかえすことを理想とした白石の経済政策の、そのどちらの側に適切さを認めればよいのかという問題の一つを取り上げてみても、従来の白石の政治経済政策に対する評価には、疑問とされる点が多いといわけなのである。大石慎三郎氏は、白石の政治は「勧農抑商」的色彩の濃い保守政治であり、「総括的にいって失政と評価せざるをえないだろう」と述べている。

享保・寛政・天保の改革など、所謂改革の政治というのが、近世にあっては、保守的時代のなかでも更に保守的色合いの濃い、一種の反動政治であったことは定説になっているが、白石の政治改革もまた、寛政・天保ほどではないとしても、やはり近世封建時代の改革政治が持つ宿命の如きものを免れなかったのであろうか。

しかし私は、今のところ白石の政治の良し悪しについて、もうこれ以上触れる自信はないように思う。近世にあっては、政治的理想や良心（それは儒教の仁政主義に基いている場合が殆どであるけれど）に忠実であればあるほど、現実から見放され、為政者の倫理観に疑いが持たれるほどの、放縦気儘なやり方が、却って現実社会に活気を呈する原因になるという、この二律背反は宿命のようにつきまとっているのだ。つまり一般的にいって、政治的理想や善意が、現実にあっては殆ど効を奏さないばかりか、むしろ社会全体を畏縮させるような結果として作用し、大抵は躓いてしまう。反対に、良心的でない気儘な放縦や贅沢三昧が現実を活気づける。こういう近世封建時代の社会経済の根本的矛盾が持つ、宿命的な欠陥が、日本の政治的風土に与えた影響はずいぶん大きい。善意の良識家や知識人たちには、政治への反感、または嘲笑や失望や無関心を生み出したし、欲望や衝動に身をまかせ、したい放題をやり、さして良心の咎めも感じない実際家には、何をやっても構わないのだという気儘さを植つけてしまった。

白石は、近世社会の構造がもたらす根本的矛盾を、政治の場で体験した最初の人ではなかっただろうか。この時代はおそらくまだ、士大夫階層の政治への意志というものが、それほど萎縮していたとは思われない。

「臣忝く講読の職を叨りにすること十四年進講の日に及んでいまだかつて身のゆへを以てあへてその言をかくさず其志ひとへに我きみをして堯舜のきみとなして此民をして堯舜の民たらしめんとおもひのぞむにあり」（『進呈之案』全集第六巻）

と、家宣に対して熱っぽく語りかける白石の言葉には、現実の諸矛盾によって混濁屈折する以前の、近世的理想主義が光っているのである。白石の政治は、厳密に言えば確かに失政であったかもしれない。しかしだからといって、これによって白石の人間的価値に対する評価までが値下りするとは思われない。否むしろ、社会構造そのものに内在する客観的論理と、人間の主体的情熱や決断や行動の間に横たわる、調和し難い溝という、深刻にして永遠な課題の持つ意味が、白石という一人の偉人を通して、私たちの前にありありと甦ってくるのである。だから白石の「限界性」とその「挫折」[4]というような、冷めたい見方にも納得できないのだ。儒教的仁政の理想主義、それに類まれな決断力と実行力をかわれて、白石は事の成り行きとして政治の中心に押し出され、遂に乗り越えきれない壁にぶつかるぎりぎりのところまで、自分の意志を貫き通し

たのである。

白石の政治的敗退を、その朱子学的政治理想が、現実に適応しきれなくなったからだとの見方も、理由がないわけではないけれど、彼が現実にぶつかった壁は、その政治的理念の、または現実の政策上の失敗と破綻というような、理論的分析により抽出できるような「限界性」[5]ではなくて、現実の幕政の周辺をとり巻く人間たちのかけ引きや思惑、さては権謀術数といったようなものに抗しきれなくなったからではないだろうか。はっきりいって白石は、将軍後継者問題をめぐる政争に破れたのである。といっても白石が自から、この政争の渦の中に身を投じたのではなく、尾張家から後継者を入れることを強く望んでいた家宣の遺志（これは『折たく柴の記』に明記されている）を尊重していたから、紀州家から吉宗を入れる政治運動には荷担できず、傍観せざるを得なかったのではなかろうか。将軍後継者問題についてだけは、『折たく柴の記』の記述には、前後に瀝然とした矛盾があって奇異であるが、それだけあって、これは白石にとっては最大の難問題であり、彼自身いちばん苦慮し、微妙な立場に立たされていたのではないだろうか。白石個人としては、紀州家から吉宗を迎えることに、とりたてて反対する理由は持っていなかったのかもしれない。後継者問題で内紛を起こすことが、政権の危機に連なるという認識は、歴史家白石が、過去の歴史から学んだ最大の教訓であったはずだ。[6]傍観しようというのが彼の気持ではなかったか。しかし家宣の側室で家継の生母であった月光院―間部詮房―新井白石という一連の関係は、誰が見ても当時の江戸城では、故家宣と深い縁故に結ばれた人達で、吉宗支持者にまわった普代の老臣幕閣連にとっては、当面の政敵に見えても止むを得なかったのだ。

白石の引退、つまり家継の死の二年前（正徳四年）に起こった大疑獄、絵島生島事件は、おそらく、故家宣の遺志と結びついた旧勢力の止めを刺し、幕政への影響から締め出すことを目的に、紀州家支持者の人々によって仕組まれた陰謀に違いない。この疑獄の目的は主として大奥関係に向けられたものであるから、勿論白石の政治的地位にまで及ぶような性質のものではないが、この事件の意味するものを、彼ははっきりと見て取っていたに違いないのだ。

政治的信念や理想、政策上の問題とは関係もなく、現実の勢力関係の強弱に、陰謀やかけ引きが加わり、重大な政治問題が理不盡に決着していく。この非情な政治世界について、白石は何を考えたのか。自伝には引退直前の、政局転換に関する周辺の動向や、彼の体験について何も記していない。しかし吉宗に罷免される二年前、正徳四年家宣の三回忌に、彼自身致仕を正式に願い出た事実がはっきりしている以上、家宣の死後、彼の気持は、もう政治から離れていたのではないだろうか。

経済政策はもとより、朝鮮聘使に関する事がらでも言えるのは、白石の政治問題への取り組み方は、周辺の事情を深く熟考配慮して、諸々の条件のかね合いの上で基本政策を立てるのではなく、意志の強さによって思うところを断行するという色合いが強い。私的な理想と信念において事を行うという、古武士的な思い詰め方であり、自分が正しいと信じたら梃子でも動かないのである。このような政治的場での態度と、特に経済政策上に、いささか現実への洞察を欠いた点、庶民に対しては儒教的仁政主義に終始したことなどをかね合わせて、白石の思想が、当時に

おいてもすでに古態になりかけた、朱子学的理想主義の範囲に止まっていたことを指摘するのは簡単である。しかし理想と現実の相貌が、分ち難く結びつき、彼の内部でひと連なりの未分化状態を呈していたからこそ、行動的な烈しい個性の体現者としての、白石独特の風貌も生じたのである。彼が優れた散文家として、文学史上に大きな足跡を留めたこと、人間中心の合理的な歴史観をうち立てることができたのは、やはり彼が行動性に富んだ儒教的理想主義者だったからこそである。白石にあっては現実と理想、公的なものと私的なものは、常に同一平面上にあって、その間に断絶分離が殆ど意識されていない。少くとも政治的失脚をするまではそうであった。

丸山真男氏は「徂徠学に至って規範（道）の公的＝政治的なものへまでの昇華によって、私的＝内面生活の一切のリゴリズムよりの解放となって現われたのである」（『日本政治思想史研究』一一〇頁）と言い、「理念型的に言へば一般に非近代的な、ヨリ正確には前近代的な思惟はかかる意味における公私の対立を知らないのである」（同一〇七頁）として、政治思想としては、朱子学に比して徂徠学がより近代的であると評価される。しかし人間の可能性の全体的投影ともいうべき文学の場から光を当てるとき、朱子学的、従って丸山氏の表現によれば前近代的な思惟方法の持つ可能性はまったくなかったのか。『折たく柴の記』のなかからそれをさぐってみたいのである。

（二）

享保元年、吉宗が八代将軍として江戸城に入ったのを契機に本丸寄合を解かれ、幕政の顧問を罷免された白石が、その年の十月十四日、六代将軍家宣の命日を期して書き始めた『折たく柴の記』については、近代になっても早くから注目され、また論じられてきた。実際この書は元禄—享保期という近世前期の限られた時間内では勿論のこと、その後二百年を経過して近世末期に至るまで、遂にこれほどのものは何人によっても書かれなかったと断言できるほど、質的に優れた自伝文学なのである。羽仁五郎氏は、近代になって、福沢諭吉の『福翁自伝』などへ発展する、その先駆的開拓的位置を占める作品[7]だと評価されていたが、だとすれば近世ではやはり『折たく柴の記』に後続する優れた自伝文学は、遂に生み出されなかったということになる。自伝的著述は非公開を前提にして書かれるのが立て前になっていたから、この近世前期の優れた自伝文学も、他に影響を与える機会を遂に持ち得なかったことにもよるだろう。私的なものを公的な場へ提示するのを極度に抑制した、日本の伝統的な制約が、文学芸術に与えた影響は大きかったのである。

近代になってもこの作品は、国文学者よりも歴史家によって注目される度合の方が、より多かったのではないだろうか。政治史の信頼できる資料として重視されてきたことにもよるが、自伝的性格を帯びる力のこもった作品が、日本には歴史的にも数が乏しく、こういうものを読み物として愛好する嗜好性が読者の側にも欠けていて、何か特殊視され、文学作品としては扱いかねるという伝統的風潮が今だにあるせいかもしれない。平安朝時代の女流の日記や随筆がもてはやされ、大いに愛好されてきた一面を思えば、これは確かに奇異である。まさか女性的な身辺雑記や雑感、愛の悩みを詠じたり、こまごまと認めたりしたものは文学的

であるが、士太夫の自叙伝は文学にはならないという区別があったわけでもなかろうが、どうもなんとなく暗黙のうちにそれを認めるような傾向が、今でもあるように思われてならないのである。

例えば愛の苦悩に身をやく女の、感性のリズムともいうべきものが直接に伝わってくる、あの『かげろふ日記』もやはり自伝という形式をとる。これはまさに平安中期を生きた女性の優れた内面生活の記録なのであるが、この作品の持つ歴史的時間を越えた普遍性というようなものが、あまりにもなまなましくて胸打たれる思いのするのは、おそらく愛を求める女の苦悩という、もっとも永久不変のテーマを表出しているからなのに違いない。苦悩は愛でなくともよい。貧の苦、病の苦、世に容れられない不満、ともあれ苦悩は何時の時代でも人間にとってはもっとも普遍的な課題なのだ。これに適切な表現が加われば、文学への道は自ずから通じるというわけだ。

しかし『折たく柴の記』の表現を支える内的指標は、これとはまったく逆の方向を向いている。男と女の書くものの違いに加わえて、この時代の特殊状況が大きく作用しているとも言えるが、勿論それだけでは済まない。苦境を追憶するとき、私的感情をまさぐるような方法、感傷的な言葉に頼って自己外化を行い、自己の普遍化をはかるという、もっとも直接的であり、また安易に見える方法を拒否する姿勢が一貫してあるのである。たとえば、

「貧は士の常などいふ事あれば、私の事におゐては、いかにも堪忍びしかど、つかへしたがふ身には、そのほどにつけてなすべき事とも多ければ、つゐに財盡き力窮りて、卅三才といひし春に至て、ありし事共書あらはして、身のいとまを給るべき由を申す」（『折たく柴の記』上）

「その程すぎて、つゐに我請ふ所をゆるさる。此時におよびて、家に餘れる資財をはかり見しに、青銅三百疋、白米三斗には過ず。『よし〳〵、忽に餓ふる迄も事もあらじ』といひて、妻孥引ぐして、年此師檀のゆかりにつきて、高徳寺にゆき至り、やがて浅草のほとりに宅借りて移れり、なを一僕一婢のあひ随ひしをも、めしつかふべきたすけもなし。『いかにもなりゆけ』といひしに、『おのれら習はぬわざをもなして口もらふほどの事をばいとなみなむ。いかでかはなれまいらすべき』といふ也」（同右）

老中の堀田正俊が貞享元年、縁者の若年寄稲葉正休によって殿中で刺し殺された事件に触れ、それに後続する部分の記述である。堀田家は嫡男によって辛うじて家の存続は許されるが、転封、削封と次々に苦難が続いて、譜代の家臣も離散していく。堀田家に仕官の道が開けて五年有余の、まだ三十歳代の白石にも当然のこととしてどん底の苦境が押し寄せてくる。生涯で最初に彼を襲った、もっともつらい時期だったに違いない。四十年後これを回想するときの書き様は、実に淡々としていて事務的だ。時間の隔りがなまなましい感情的表現を奪ったと考えられるかもしれない。

しかし享保二年の正月、幕政を罷免されて後、今までの邸宅を没収され、とりあえず深川の借家へ引越す予定のところ、その前夜に大火に見舞われるという二重の災難に遇ったことがある。その直後の、友人小瀬復庵への書信には「すべて患難憂戚の事士の常に候、況や某事卑賤より

出候ものに候故、凡天下の険阻艱難は経歴し盡し候、一身の上につきては此度の事など塵芥蟲飛の前を過るよりも事軽く候」（全集五巻・一七八頁）などと書き送っている。ここでは自分のことより、類焼した友人室鳩巣の身の上について案じているのであるが、困難な私的体験を人に訴えかけるような発想はまったく持っていない。私的な困難は「塵芥蟲飛の前を過るよりも事軽く」と、自分で表現を封じてしまうのである。それは実にさりげないやり方でそうされるのであって、わざとらしさや痩我慢ではない。

「貧は士の常などいふ事あれば」とか「すべて患難憂戚の事士の常に候」というこの常套的表現の出所の裏には、身は清貧であっても志のみは高くなければならないという、儒教的君子像があるのか、さもなければ元禄的繁栄の陰で、日々窮乏に追い込まれる武士生活の実感があるのか、それらを探るのは無駄なことである。「妒婦の養ひがたきも、老ての後其功を知る」と、上田秋成は『吉備津の釜』の書き初めを故諺の一般的命題にとりつく姿勢から始める。だがこれは彼の内部では持続されない。「咨（ああ）これ何人の語（ことば）ぞや」と、忽ちのうちに私の内部の声によってこれを遮り、「害（わざは）の甚しからぬも……」と実に激越な表現に身を委ねてしまう。その激越な表現を自制し、再度平衡状態を取り戻そうと辛うじて身を支えるような息づかいのなかに、「さるためしは希なり」が始まり、「禽を制するは気にあり……」と『五雑組』より引用した普遍的命題へ再び帰って行く。だがこれも勿論持続は困難なのである。ということはそれだけ内的起伏を経過しなければ吉備津の物語は始まらなかったことを意味する。この物語は普遍的論理や命題（それは故諺などにもっとも特徴的に集約されているのであるが）が語りかける、世間を世間として成り立たせている秩序や常識的なものに対する、秋成の怒りであり挑戦だったのである。

だがこれは江戸も中期に達した明和の頃の、一人の文人の鋭くとぎ澄された孤立的な自意識の業であり、全ての秩序や常識が、皆偽物に見えてこざるを得なくなった時期のものなのである。はっきりいえることは、公的な世界と私的な世界とがまったく別物として意識されていることであり、別物を別物としてそれぞれ純化させて両立をはかるという、徂徠的な安定均衡感をとっくに通り越しているのである。

ここまで深化してしまった明和・安永期の、孤立化し尖鋭化した人間の意識を思うと、白石的存在は、もはや神話的偶像になりかねない程遠いものとなってしまう。白石にあっては私的世界は常に公的秩序に収斂」吸収されていくはずのものであり、それが独自の秩序を要求して一人歩き始めることなどあり得なかったからだ。その間に矛盾や断絶はなく、「貧は士の常などいふ事あれば」と、私的苦境までがさりげなく秩序のなかへ解消される。とすれば彼は、まさに丸山真男氏のいうような「前近代的思惟」の人間であり、ヴェブレンのいう「野蛮文化の比較的高い段階」（『有閑階級の理論』）の時代の、野蛮的な文化人の最たるものということになるのであろうか。

しかしこれでは白石が、何故自叙伝というもっとも個人的スタイルの散文を書いたのか分らなくなってしまう。

「貧は士の常などいふ事あれば」という一見自己を押し流してしまう

かに見える言葉も、白石には、祖父から父を通って自分へ流れる三代の血を通して意識された、強い自意識の内側のものであった。この血を通して自覚された自意識というものが、白石の場合は特に問題になるのではないだろうか。

『折たく柴の記』の前三分の一は、特に個人的な事柄に関する記述で、自分の生い立ちや幕政に参加するまでの体験を述べているのであるが、彼が自分について語るのと同様に、いや場合によっては更に印象的な筆致で熱をこめて語っているのは、父や祖父についてである。この部分が無く、後半三分の二だけがこの書の全てであったとすれば、『折たく柴の記』は白石の単なる公務の回想録となったのみで、政治史の資料的価値には変わりはないだろうが、自伝文学としての面白さ、特に彼の思想を形成してきた諸々の契機についてそれほど深く知ることはできなかったにちがいない。

白石は何故に自伝を祖父の代に溯って書き起こさなければならなかったのか。勿論、

「おやおうぢの御事、詳ならざりし事こそくやしけれど、今はとふべき人とてもなし。此事のくやしさに、我子共も、また、我ごとくの事ありなん事をしりぬ。今はいとまある身となりぬ。心に思ひ出るおり〳〵、すぎにし事共、そこはかとなく、しるしおきぬ」（序）

と、先祖の事に関しては知っている限りは子孫に伝えたいという願望もあったに違いない。人を語り、己れを語るには、まず先祖から説き起こし、家系の説明を以って始るのは、当時の自伝・人物評などの当たり前の形式であったといえばそれもそうである。しかし白石には、祖父勘解由―父正済―白石という、自分を含めての三代の人間を結合する強烈な一体感がある。これは単なる祖先崇拝とも家門尊重とも少し違うように思われる。言わば、血を通して自覚された強烈な自意識なのである。

『新井家系』に依れば、祖父勘解由は上野国で成人したが、戦国末期天正年間の戦乱の最中に、上州を去って常陸に来て、下妻城主多賀谷修理大夫に仕えたという。多賀谷修理大夫が関原合戦に西軍に属したことから没落し、勘解由も逼塞して農耕生活を送り、慶長十四年、さほどの高齢にもならないうちに世を去ったという。白石が先祖の人間について知っている確かな事柄はこれのみだった。しかし彼は歴史学者らしいやり方で調査をし、新井氏の先祖は上野国の新田源氏だと断定し、自分も「従五位下源朝臣君美」と署名したりしている。これは宮崎道生氏も「右の家系関係の記述だけは疑問の存するところであって、直ちに白石の言に従うわけには行かない」[8]といわれるように、まったくこれという客観的な証拠も無いことのように思われる。はっきりしていることは、戦国末期の混乱の中に壮年時代を送った祖父勘解由は、戦功もあったが、武士としては晩年は失意浪々のうちに生涯を終わったということであり、祖母という人の出身についても、白石は殆ど知ることができなかった。羽仁氏のいわれるように「門閥意識を失った」[9]状態だったのである。これは門閥家柄意識の強かった近世武家社会においては、致命的な欠落状態ではなかったであろうか。一般に元禄時代前後を個性自覚の時代とし、白石の一生もこれに相応するように、強い自我の主張に貫かれているとする見方があるが、その根源に溯れば白石の場合は、門閥意識の欠落が、もっとも大きい自意識の原動力になっている。門閥家柄意識

を持ちすぎると、たとえば『三河物語』の作者のように、人間は自己限定を強いられ、保守的になり、自己意識の在りようは歪んだり稀薄になったりする。自分を語っているように錯覚しながら、実をいえば自分には属さないまったく別の事柄を語っていたということが起こり得るのだ。白石の場合は持ちたくても持てなかった門閥家柄意識に代わり、血を通して自覚された明確な自己意識があったといえる。

それは家系や門地を誇らかに、或はもったいぶって語るような意識ではなく。勘解由個人、正済個人を語ることにおいて明確に表出されるように、血を分けた人間であることによってその関心はいっそう切実になるとはいえ、もともとは人間個人に対する強い関心から導き出されたものである。個別的存在としての人間に強い関心や共鳴を抱くとき、それに血統意識が加われば、そこには強い自意識が誕生し、同時に血統意識によって個別的関心は普遍化されて、行動への指針すらもが自己の内部で開示される。白石の父や祖父に対する一体感はこのようにして形成されたものであった。だから特に父親正済に対する白石の共感と敬慕は、彼の人間形成に重大な意味を持っていたのである。祖父や父親への敬愛敬慕といえば、我々はすぐに日本的な家の制度や敬神崇祖、儒教的な孝行という徳目など、制度や秩序的なものに還元してしまう癖があるが、白石の場合のように、近世の初期でもそれが相当の程度個人の内的契機に深く関わっていた場合のあったことを忘れてはならないだろう。勿論この場合、家の制度や家の意識とは殆ど無関係で、血の意識を通して強化された、個人と個人の関係として、敬愛の対称は普遍化されていなければならないのだ。

「我父のわかくおはせしほどは戦国の時をさる事遠からず、世の人遊侠を事として、気節を尚ぶならはし、今の時には異なる事ども多く聞えけり。我父にておはせし人も東走西奔、その蹤跡さだまれる事もなくして年を経給ひし」

と、父正済について書き始めるそので出しの第一歩から文章は簡潔で強靱だ。

白石の父新井正済は父勘解由の死後、兄たちの世話で新井家にとっては召使筋に当たる家へ養子にやられた。十三歳の時偶然のことからこの事実を知り、子供心に屈辱感止み難く、同時に世に出たいという気持も強かったのであろう。故郷常陸を出奔して放浪生活に入り。三十一歳の時土屋家（上総久留里の城主、二万石）へ仕官して目付役まで出世した。意志が強くて簡潔な生活を好み、口数少なく行動的で人々に信頼された古武士的風格のある人物というところだろうか。晩年には土屋家に内紛が起こり、その家も断絶したので再び浪人になり、勘解由と同じように浪人生活のうちに生涯を終わった。

白石の文章がこの父を描くとき、ことさらに簡潔強靱、張りつめた美しさを持つのは何故だろうか。

「むかし人は、いふべき事あればうちいひて、その餘はみだりにものいはず、いふべき事をも、いかにもことば多からで、其義を盡したりけり。我父母にてありし人々もかくぞおはしける」（序）

という言葉で白石はこの書の序文の冒頭を始める。「身静なる時には、つねにおはします所を浄く掃ひて、壁上に古畫をかけて、花瓶には、春

秋の花を、すこしくさしはさみて、それに対して、黙坐して日を消じ給ひ」とも書く。「かくおはせしかば、あはれ、問まいらせばやとおもふ事を、いひ出がたくして、うちすぐる程に、うせ給ひしかば、さてやみぬる事のみぞ多かる」（序）と、寡黙な父から、その経験談や見聞をたくさん聞き出せなかったのを白石は残念がるのである。白石ばかりか今日の私たちにも残念と思われることは多い。たとえば「我父にておはせし人も東走西奔、その蹤跡さだまれる事もなく」という正済の青少年時代の行動の内容が、幾分でも具体的に知れたらどれほど興味深いことだろう。しかしそれでも長い生涯のうちに、正済が白石に語った回顧見聞談は可成りの量になっている。『折たく柴の記』中に、正済の回顧談としてのせられる若い頃の友人越前九郎兵衛なる人物と、年経て箱根山中で邂逅した話などは、父が語った話として友人の室鳩巣への書信（全集六巻四百十頁）にも紹介されているから、おそらく白石はメモのようなものを作って父の話を筆記していたのではないか。父が同じ事を何度も繰り返して話すような人ではなかったから、このことは尚更必要だったのだろう。

だがそのメモがあったと仮定しても、『折たく柴の記』の記述は、父の言葉の口移しでなく、白石なりの表現におき換えられていることは、越前某について記した鳩巣への書簡との間にも、相当表現の違いがあることからも言える。むしろ書簡の方が父正済の語るものに近いようだ。少し長くなるが比較してみよう。

「夜半過る時に、かの老翁がふしたる所に入りて、四尺ばかりなる三尺ばかりなる竹の擔のごとくなるもの二つもち出して、その中より刀と脇ざしとをとり出して、ふところより鍔二つを出す。『かかる身にはなりぬれど、このものはいまだ身をはなさず。見覚てこそおはすべけれ。身まづしけれど、我力の限りは老たるものを飢す事もなく、凍すこともなく、八十に餘しものゝよはひ久しかるべきにもあらず。我養ひを終りたらむには、ふたゝび出て、つかへの道にも志たがひなむは、父と祖とに報ゆるみち二ツながら全くや有るべきとおもふが故也』といひて涙をながしたり。いふべきことばもなくて『比道具をば見もわすれず』といひしに、『抜出して見給へ』といひしかば、二こしながらぬきてみしに、氷のごとくにして露ばかりもさびし所もなし」[10]（室鳩巣への書簡）

これが『折たく柴の記』になると、左のような書き方になる。

「かの父のふしたるところに入りて、おふごのごとくなる竹二本取来りて、そのふたとなせし所をひらき、中より三尺ばかりの刀と、二尺あまりの脇ざしの刀とを出して、又ふところより鍔ふたつとり出て、火の光にそむきて、その刀と脇ざしとを鞘よりぬき出し見て、我前にさしおく。いづれも氷のごとくなるを、金作りに飾れるに、鞘にはかゐらぎといふ鮫かけし也」

一方は書簡文、こちらは自伝だから、筆を執る時の心構えもまったく別物となるだろう。文章は簡潔になっている。だが簡潔とだけ言って済まされないのは、越前九郎兵衛なる落ぶれた浪人の描き方がだいぶ違ってきている点である。書簡文では慰さめる言葉も無かった父正済が辛うじて「その大小には見覚えがある」と言えば、「抜いて御覧なさい」と言い返すのは九郎兵衛である。刀は武士の魂だというが、身は落ぶれて

もわが魂は健在であることを、九郎兵衛は進んで旧友正済の手で検証してもらいたかったのだ。侍同士の心の通い合いが、如何にも素朴自然な形でここにはある。

これに対して『折たく柴の木』では、火の光に背いて、大小を鞘から抜き、友人正済の前に置いたのは九郎兵衛自身である。その間無言で過ぎる重い時間の経過、浪人九郎兵衛の孤独な影――『折たく柴の木』には計算された表現の跡をはっきり読み取れるのだ。文体は簡潔で引しまっているが、これも効果的に計算された表現の技巧に負うところが多いのではないだろうか。決して文章の簡潔性と生命力を保証しているのが、「合理的思惟構造」[11]などではないのである。

こういう白石なりのやり方で創出された技巧的表現の跡を、全てにわたって検証しつくすことはまことに難しい。正済の談話に近いメモのようなものが残っていないからである。しかし越前九郎兵衛の一事だけを見ても、白石の文学的表現力の並々でないことだけは察知できるのである。

この辺の問題をもう少しはっきりさせるために、『折たく柴の記』中の正済に関する記述の部分にもう少し触れておくことが必要である。

「むかし人は、いふべき事あればうちいひて、その餘はみだりにものいはず、いふべき事をも、いかにもことば多からで、其義を盡したりけり」（序）と、まず冒頭で「物言ふ」という行為について、白石の父親たちの世代が如何に用心深かったかを記している。しかしこれは俗に言う〝口は災のもと〟という処世上の打算とは異なり、序文に記される病中の父親のエピソードが物語るように、精神的自立を支える「恥」という内的感覚と多分に結合しているものだ。「およそは、人の気力は齢と共に衰へぬるものなれば、耄すべき期至りぬれば、いかにつゝしみおもふ心ありとも、耄せざることを得べからず。さればわかくさかりなる時より、その心得したらむには、たとひ耄期に至りぬるとも、うち見る人のあさましとおもふほどの事はあるまじきものにや」という正済の教訓もまたそれである。これは正済の生活的信条になっていたようだが、多言を費さなくても意志を通じ合えた中世の共同体的秩序感覚が、まだ人々の心をつなぎ止めていた古い時代であったことを思わせる。

面白いことは、白石が父正済について力をこめて語る行為やエピソードの一つ一つが、殆ど「物を言わない」ということの効果の大きさに関係あることである。正済の談話がこのような傾向を含むものであったことは、彼の生活信条からも察しがつくが、それを白石は全ての人物描写に押しひろげ、効果的描写の方法として吸収してしまった。〝言わぬは言うにまさる〟という、特別な時間の持続を作り出したのである。

灯影に背いて氷のような刀を抜く越前彦九郎の行為がそうである。正済の主君土屋利直が、若さにまかせて不埒な行為をした近習の蘆沢某を手打にしようとして、その場へ正済を呼び出し、それとなく意見を求めたことがあった。

「答申す事もなくてありしに、やゝありて、『いらへ申す事もなきは、おもふ所やある』と仰られしほどに、『さん候、かれがつねゞゝ申候ひしは、『いとけなき時に父にをくれし身の、莫大の主恩によりて、かくまでは生長しぬ。此恩に報ひいまいらせむ事、よのつねの人々の

ごとくにしてはかなふべからず』と申す。天性不敵なるものの、しかも年なをわかくして、おこのふるまひも多く候へば、いかなる奇怪をか仕出して候ひぬらむ。但しわかく候時に、かれらがごとくなるものにあらずしては、年たけ候ひし後に、ものの用にはたゝぬもの多く候歟。これらの事を存めぐらし候につきて、御答の遅く候ひしは、恐れおもふ所に候』と申す。またのたまひ出す事もなく、我もまた申す事もなくしてさぶらふほどに、やゝありて、『面に蚊の聚りぬるぞ。逐ふべし』とのたまひしほどに、顔を動かしければ、血に飽て、胡頽子のごとくになりし蚊の、六つ七つはら〳〵と地に墜しを、懐の紙をとり出して、つゝみて袖にしてさぶらふ。またやゝありて、『罷帰りて休み候へ』とのたまひしかば退出す」

この条はもっとも典型的な例であるが、この種の描写はこの作品中にちりばめられている。一人の若者の命をめぐって、言葉少なに対座する主従の間に流れる沈黙の時間。この「言わない」ということが無為に流れる日常的な時間ではなく、事の重大さをはらんで緊張し、しかも緊張したまま停滞しているのではなくて、動いている、いわば行動している時間なのである。時間と空間を一点に凝縮させ、持続させるこの「言わない」ということが演出する効果を、白石は実に効果的に自分の散文中に定着させている。このために表現の裏側には、もう一つ別の意味が溢れ、別の時間が流れて行くかの錯覚に陥るのだ。

おそらく白石の父親が語った「言わない」ということの意味は、このようなものではなかったはずだ。彼が「言わない」ということを生活信条にできたのは、多言を費さなくても意志の伝達を可能にした中世武家社会の母胎である村落共同体的な連体感と共通意識が、まだ近世初期の社会に残っていたからである。蘆沢某の成敗をめぐって主従の間に殆ど無言のうちにとり交わされた了解は、父正済にとっては、細事にわたって多言を費さなくとも、殆ど対座し合っているだけでお互の心の内が理解し合えたことの満足感であったにちがいない。或は殿様が蚊の事を気になさるうちに、いつの間にか緊張がほぐれ、蘆沢某のことは脇になり、事の成り行きとしてお手打は止めになったというような、「蚊」が主役に成り変わったことの面白味を伝えるようなものだったかもしれない。当時の座談や咄というものは、だいたいこのような形に納るのが普通であった。このような場に居た実際の正済が孤独だった筈はない。

ところが「言わない」うちに経過していく時の流れから分化される、特別の効果を狙って集中していくような、白石独特の表現によって描出される人間像は、実に鮮明そのものだが、皆ことごとく行動的な孤独人というような相貌を帯びてくる。祖父勘解由の日常もそうである。勘解由の晩年は田園生活のうちに、貧しくはあったが安らかに過ぎて行ったのかもしれないのだが、そういう安定や調和感のうちに人間を想像するというやり方は、白石にはまったく無関係なものだった。例え過去の追憶に耽ける人間にすら、無言のうちに示された激しい行動性がなくてはならなかったのだ。こうして白石によって表現された父正済も、また著しく〝孤独な武人〟という面影を強くしているし、父によって語られた諸々の人たち、先に引用した越前九郎兵衛も、人を斬って出奔し、その後零落した高滝吉兵衛という侍の晩年の姿もまたそうであった。

その孤独であることの描出は、心境の叙述や、自然描写を借りてなさ

れるようなものではなく、無言のうちに流れる重い時間を切り取る人間の行為や行動を、簡潔な言葉で適確に表現することによって可能となっているものなのだ。

このような人間の存在そのものに迫るような文章を、白石は何処から手に入れてきたのだろうか。これを証明すること、つまり白石の散文のお手本が何であったかについて具体的に指摘することは今の私にはうまくできないのであるが、子供の頃よく聞いたという『太平記』の講釈や、歴史研究のために繰り返して読んだと思われる軍記物の諸作品からの暗示が、あるいは幾分でもあったかもしれない。しかし根本的には白石自身の生き方や思想から説明をするしか方法は無さそうである。というのは、白石によって描出される父正済の〝行動的孤独人〟の面影は、何より白石自身の姿の投影であったような気がしてならないからだ。彼が血を分けた父親に対して抱いた共感と敬慕と一体感も、白石自身の心の中に造り上げられた見事な武人としての父親像に対してなされたものかもしれないのである。

門閥や家柄などの世俗的後楯がいっさい無い卑賤の身分、浪人の子として身を起こして、世に出ようとすれば頼るものとしては自己の器量と才能しか無かったのは、正済も白石も同様であった。才幹と器量と意志の強さで、八十余年の生涯を生き抜いた正済の生涯に、白石が共感を覚えても不思議はないだろう。父親だから敬慕するのではなく。その生き方の激しさ、旺盛な行動力に対して、一人の武士に対しての敬意を持ったのであり、同様の道を歩まなければならなかった白石には、武士の生き方の一つの規範として、父親の像は彼の内部に明確に位置づけられていたと思われる。

正済には素朴な古武士的意志の強さと行動性がある反面、恥を知るという内的感覚が支える自己抑制の力も強かった。これに対して白石の行動の原理には、学問によって身につけた朱子学的理想主義がある。おそらくこれは、理想の実現を政治の場に賭けようという思想だけに、父親の古武士的行動性よりも、遙かに急進的な性質を持つものであったに違いない。そのような白石を出世主義者と見做すこともできないわけではないが、それは彼の理想が政治に全てを賭けさせたのであり、名声欲や権勢欲に駆り立てられたのとは根本的に違うようだ。

徂徠的思惟構造は、政治思想の側から見れば確かに近代性を保証されるとしても、逆にいえば、現実世界における行動的な原理を人間から奪ったことも事実である。白石のように理想と現実、公的秩序と私的秩序が一体化しているような未分化状態は、確かに朱子学的前近代性と名づければ名づけられるだろうが、それが行動的人間を生み出す母胎であったことも間違いはない。

そして文学の側から見れば、全て未分化の混沌状態のなかで、行動的に切り開かれた様々な新しい現実こそ、表現の母胎として意味を持つ以上、白石の思想や作品にこめられた意味は、もう一度見なおされる必要があるように思われる。

〔註〕

（1）日本思想史研究会編『日本における歴史思想の展開』昭和四十年　吉川弘文館

（2）田原嗣郎「江戸時代前期の歴史思想」

（3）『新井白石』（中央公論社刊「日本の名著15」）の解説「日本の百科全書家新井白石」

（4）宗政五十緒「折たく柴の記――新井白石」論」（「日本文学」五十八号・六十号）

（5）宗政五十緒氏の前掲論文

（6）この点については『読史餘論』中の、足利将軍家歴代の政治評のところで特に強調されている。

「闇主自ら邦家を覆し給ふも、奸臣世を乱らむとするも、必ず継続の事に起るなれば、よく〳〵心得あるべき事なり」（岩波文庫本二六二頁）

（7）羽仁五郎著『白石・諭吉』（岩波書店）

（8）宮崎道生著『折たく柴の記釈義』（至文堂）

（9）羽仁五郎著前掲書

（10）原文は句読点、会話の『……』は無い。古典文学大系本（岩波）と比較するために、筆者が施したものである。

（11）宗政五十緒氏の前掲論文